

梅鶯仏教壮年会報

第137号
2016年
10月30日

報恩講

※法輪寺報恩講
と併修

十一月二十六日（土）

「いただきます」「ごちそうさま」
それを言えない子どもが多い。
言えないのではないのだ。
教えられていないのだ。

それもそのはずー
親が、それを忘れてる。
感謝の心を忘れてるのだ。
掌（て）を合やすことを
忘れてるのだ。

寺川幽芳「こころの掲示板」よ

「梅鶯」のルーツを訪ねて②
会長 森 勝昭

□梅鶯仏教青年会の発足

昭和二十三年三月九日（日）、
すでにこれまで宇賀野には一般的
な青年会があり、その活動の一つ
として、毎年演劇会が行われてお
り、その活動に字より補助金が交
付されていた。

農道にお礼として、この日、浜道
その作業が終わってから、当時
の青年会長より、会員に対して、
青年会有志において仏教青年会の
結成についての話があった。
全員の賛成を得て、翌日十日に
はさつそく法輪寺にて結成準備会
を開く事が決められた。
なお、ここに至るまでには、発
起人たちによる何回かの打ち合わ
せがあったものと考えられる。

□結成準備会

翌日の三月十日に開催された結
成準備会では、規約・名簿・会費
・名称などが協議され、以下の事
が決められた。
「位置付」
宇賀野青年会とは別途の団体と
する。

「名称」
梅鶯青年会

※ここに初めて「梅鶯」の名称が
出てくるが、名前のいわれは、法
輪寺前々住職の長野覚了さまが、
梅が大好きであつたことから命名
されたと伝えられている。

「会費」

毎月一人当たり1円まで

「会合」

法輪寺において毎月一回会合を
行う

「初代会長」

北村和男氏

「顧問制度」

行事の件、講師の件などの相談
役として、長野覚了師、長野隆法
師を顧問に推薦する。

※なお、のちに蓮成寺の中村裕海
師、了信寺の渋谷了温師が顧問に
加わっておられる。

□その後

結成総会は同年四月十日に行わ
れ、六月十日の例会にて、礼拝聖
典が一冊三円三十銭にて会員八十
人に配布されている。

なお会の名称は、昭和二十四年
に梅鶯青年会から梅鶯仏教青年会
に改名されている。つづく

＊次回では梅鶯仏教青年会の活動内容
を紹介致します。

題材法話

私の住居は、法輪寺から東へ500メートルくらい
の所にあり、常は車か自転
車で往復しています。
ところが、昨年の正月は
大雪となり、歩いて往復せ
ざるを得ませんでした。
一日中お寺で過ごしたあ
と、夕刻になつて、妻と二
人で住まいに向かつて歩い
ていた時のことです。
ふと見上げると、東の方
の山並みや、家々の屋根が
赤く染まつているのに氣付
きました。
思わず後ろを振り返りま
すと、西の空が夕焼けで真
っ赤に染まつていました。
何とも言いしれぬ、厳か
で、美しい光景でありまし
た。

○夕焼け小焼け

夕焼け小焼けで

お鐘山日
手がの暮
々鳴のお
つる寺れ
ないのて
で

みな帰ろう
鳥と一緒に
帰りましょう

という日本人に大変



親しまれている歌があります。この歌は中村雨紅さんという有名な作詞家の歌ですが、この歌には、日暮れの風景の中に、なんとも情感があふれて、この歌を唄うと、なにかほっとする気持ちになります。

ちよつと余談ですが、「夕焼け小焼け」の「小焼け」というのは、ある本によれば、夕焼けに赤く染まった西の空が、次第に暗闇へと沈んでいきます。そして完全に夕焼けが沈んでしまった頃に、どういう現象なのか、もう一度ふつと赤みが戻ることにあるんだそうです。これが「小焼け」だそうです。

それはともかく、宗教学者の山折哲雄さんが、ある時、韓国の仏教学者にこう言われたのだそうです。「あなたの方、日本人が唄う『夕焼け小焼け』という歌には、仏教の本質のすべてがうたい込まれているのではないでしようか」

○西方浄土を觀る

夕焼で西の空が



○西方浄土を觀る



真つ赤に染まる夕映え。寺で撞く晩鐘が聞こえる。一日が終わって、ふと我に帰るひと時を、この歌は見事に歌っています。

そしてその次に「手をつないで、みんな一緒に帰りましょう」と歌っているのですが、その帰る方向、日が沈む西の方向は、まさに阿弥陀様のお浄土の方角なのです。

しかも人だけではなく、鳥も動物も虫たちも、私に連なるすべての者が、皆な一緒に帰って行くのです。

仏教では「皆悉到彼国」と言い、「皆ことごとく彼の国へ到る」と説きます。

つまりこの歌の心は、仏教が教える、皆ことごとく到る彼の国、お浄土をあらわす歌なのですね。阿弥陀さまを讃える歌なのです。

そういう日本人の心を唄う歌だからこそ、ずっとみんなに親しまれてきたのだと思います。

○還相回向

親鸞聖人は「教行信証」という大事な書物の中で、



○還相回向

と思います。

親鸞聖人は「教

事な書物の中で、



「つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり」と最初にお書きになつておられます。

その意味は、私達お念仏を悦ぶ者が人間としてのいのちを終えたなら、間違ひなく阿弥陀様の本願によつてお浄土に生まれさせて頂き、仏と成らさせて頂くのであります。実はそれだけでは終わらないのです。

仏と成つたならば、今度は直ちにこの世に還つて、まだ迷つてゐる人達を救う働きをすることになるのです。これが還相回向です。

眞つ赤に染まつた夕焼けに、思わず掌を合わせ、お念仏がこぼれ出るとき、既にお浄土に歸られた親しい方々の「なんじ一心に正念にしてただちに來れ、われよくなんじを護（まも）らん」という喚び声が西空より聞こえてきそうな気がしました。



住職法話より

